NPO法人 長崎史談会

長崎学レポート

第14号
2024年1月1日発行
長崎学レポート
編集委員会
〒850-0861
長崎市江戸町5-8
第5一ノ瀬中央橋ビル

2023年度　第1回公開講座 2023年4月15日 ・ 第3回公開講座 2023年7月15日

第一回長崎学公開講座 第二部発表要旨

コッコデショの来た道

大田　由紀

一、長崎くんちへの伝播

くんちの出し物であるコッコデショは、寛政一一年(一七九九)長崎くんちに初奉納したとされる。

樺島町太鼓山（コッコデショ）

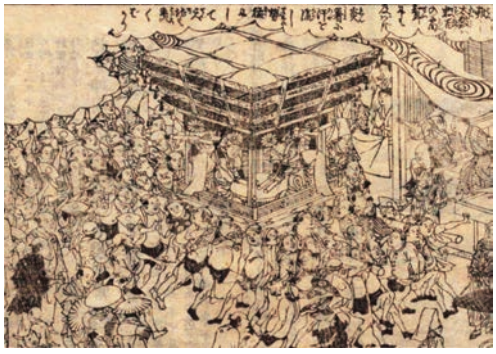
古賀十二郎は「唐紅毛船の舶齎する商品其の外の運送は主として堺船によりて行われてゐた。大坂船も亦堺船の仲間に入りて海運に従事してゐた。それで堺船の船頭水夫は長崎滞在中樺島町の船宿に宿泊するのであった。斯う云ふ因縁で堺壇尻が長崎に行わる、やうになったのである」(『長崎市史風俗編』一九二六)と記している。そのため「堺壇尻」とよばれていた。

明治三三年(一九〇〇)の「鎮西日報」奉納踊紹介には「堺臺車(さかいだんじり)(俗にコッコデショ)」と記載され「本名の堺臺車と云う名はいつしか廃れて囃歌のコッコデショーと稱するに到り…」(一〇月九日)とあることから、この頃、掛声である「コッコデショ」が出し物の名称として定着していったと思われる。

二、太鼓台

近畿・瀬戸内域を中心に広く分布する太鼓台の直接的な源流は、神輿の触太鼓にあるといわれるが、伝播した先々で同じ出自を持つ構造物であることが判明できないほどに、多様な形態の太鼓台が生み出された。

太鼓台の初出絵画史料は『摂津名所図会』巻四(寛政八～一〇年〈一七九六～九八〉編纂)に描かれた布団太鼓といわれている。長崎くんちのコッコデショと見間違うほどよく似ている。難波神社(現・大阪市中央区博労町)の夏の祭礼を描いたもので、舁(か)く人も見物衆も熱狂している様子が伝わってくる。



「神輿渡御」(部分)『摂津名所図会』国会図書館所蔵

布団太鼓は屋根部分が装飾化、風流化した太鼓台である。現在、綿を詰めた本物の座布団は稀で、近世において既に竹網や木枠の疑似布団で軽量化が図られ、これを覆うように布を巻いて本物の布団のように見せている。

太鼓台は西日本にしか見られない文化である。江戸時代後期に大坂を基点とした海運によって、西

この会は個人会員と法人会員の皆様により運営されています

みろくや　福砂屋　松翁軒　森谷商会　小野原本店　浜屋　メモリード　十八親和銀行　長崎バス　文明堂総本店

日本の津々浦々へ広まったと考えられている。

現在も豪華絢爛な祭礼から、一台のみの簡素な祭礼まで、西日本に展開する数は膨大で相当数にのぼる。

太鼓台の名称は地域や時代によってまちまちで、同じ形態の太鼓台であっても「御輿太鼓」「布団太鼓」「布団だんじり」「太鼓」「だんじり」「四つ太鼓」「やぐら(櫓)」「太鼓山」「屋台(やたい)」「勇み屋台」「あばれ」「揉み山」など異なる。また掛声から「ちょうさ」「やっさ」「せんだいろく」「さしましょ」「どんでん」「さっせい」などとよぶところもある。

三、太鼓台とだんじり

現在、愛媛県や香川県は兵庫県と並び、豪華な大型太鼓台の中心地となっている。観音寺太鼓台研究グループの調査によると、現在でも香川県下では大人太鼓はおよそ三五〇台が確認されている。(子供太鼓も多数ある)

そのなかでも観音寺市には、一一七台もの「ちょうさ」(布団太鼓)があり(二〇二一年四月時点)、一〇月に各地区で「ちょうさ祭り」が行われる。

この地域は豪華な刺繍飾りが特徴の太鼓台が多い。地元から太鼓台専門の刺繍職人が多数出たことや、地芝居が盛んに行われた土地であったため、歌舞伎衣装の衣装制作に関わった刺繍職人との重層的な関係があったと思われる。

西条祭り(飯積神社)太鼓台舁き比べ(愛媛県西条市)

近畿地方の祭礼といえば、だんじり(屋台)を思い浮かべる人も多いだろう。だんじりは「楽車」「壇尻」「段尻」「山車」「地車」などとも表記され、主に近畿、中国、四国地方などの祭礼で登場する。テレビニュースなどで紹介される激走するようなものではなく、粛々と曳いたり担いだりするものも多い。

太鼓台は、だんじりより後に各地に伝播している。新居浜浦(現・愛媛県新居浜市)は天明・寛政期はだんじりが全盛であったが、文化・文政期に太鼓台が伝播し、主役を奪われ、明治までに姿を消した。

現在は、太鼓台とだんじりがそれぞれに主流な地域と、混在しているところがある。

四、まとめ

堺船の船乗りたちが長崎に伝えたといわれる大坂の布団太鼓は、大阪市の中心部では継承されていない。遠く長崎の地で洗練され、長崎くんちのコッコデショとして現在に至る。その様式美を極めた意匠と躍動感は全国の布団太鼓の中でも特に注目に値するものである。

参考資料
観音寺太鼓台研究グループ編集『太鼓台文化の歴史』二〇一三年

第三回長崎学公開講座 第一部発表要旨

長崎の水道について

野田　和弘

一、日下県令の就任

長崎の飲料水は、明治以降も延宝元年(一六七三)に作られた倉田水樋に頼っていた。

しかしこの倉田水樋も老朽化が著しく、水源も汚染され、衛生上問題となっていた。特にコレラが多発し多くの死者が発生したので、近代的な水道が必要とされていた。

このようななか、明治一九年(一八八六)三月、長崎県令日下義雄が長崎に着任した(同年七月県令は県知事と改称)。

日下は、嘉永四年(一八五一)現・福島県会津若松市に生まれた。戊辰戦争に参戦後米国に留学、新政府に仕えた。

まず日下は、市内の井戸の水質調査を命じた。その結果、市内の井戸数三二六一の内、飲料可能の井戸は二割しかなく、過半数が飲料不適であった。倉田水樋の水質も下等であった。

日下は、上水道の建設が急務と考え、長崎区長金井俊行と会談し、早急に進めることにした。

金井は、嘉永三年(一八五〇)現・長崎市に生まれた。金井家は代々長崎代官所の手代を務めた家柄で、金井も佐賀県大書記官を務めていた。

二、上水道の設計

日下は、工学部大学校(後の東京大学)助教授吉村長策を、水道技師に採用した。

吉村は、万延元年(一八六〇)現・大阪府柏原市に生まれた。長崎市の他、大阪、神戸、佐世保をはじめ一一都市の水道を完成させている。

吉村は、現地調査を行い、貯水池の場所を中島川上流、本河内郷の御手洗川と妙相寺川の合流点に決定し、水道全施設を設計した結果、総事業費は三〇万円となった。

これは当時の長崎区の年間予算額四万円の約八倍という大変な金額であった。

三、区議会での否決

明治二一年(一八八八)一月、金井が区議会に水

道事業案を提出したところ、あまりにも多額の費用のため、多数で否決された。修正議案も再度否決された。

この水道問題は、長崎区民の中でも大論争となり、賛成、反対で町は二分された。長崎全区八八町の内、反対派は五六町で、これが同盟町を結成した。

一方賛成派三二町は連合町を結成し対抗した。反対派の動きは激しく、寺院など各所に集まり気勢をあげ賛成派を脅した。この結果秋の諏訪神事が円滑に行われるかどうかの騒ぎにまで発展した。

四、日本初の地方債

これに対し日下は、政府補助金五万円と、旧貿易五厘金の残額六万円の獲得に成功した。これで総事業費三〇万円の内、一一万円の目処がついたので、残額の一九万円は一般からの公借金とすることにした。これは日本で最初の地方債の公募であった。

金井は、この区立水道案を、明治二二年（一八八九）一月の臨時区会に上程した。前回の否決の経験から十分な議会対策を行った結果、区立水道付設議案はついに可決され、同年五月、工事は着工された。

一方後日、公借金募集の認可をめぐって内務省と大蔵省との間で紛糾した。その板挟みになった日下は、同年一二月に突然免官となり長崎を去った。

五、第一回市長選挙

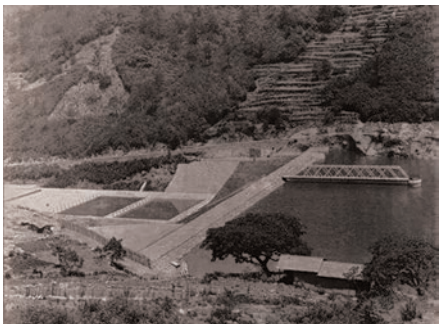
明治二二年（一八八九）四月一日、市制が施行され、市会議員の第一回選挙が行われた。水道建設の是非を巡っての猛烈な選挙戦となり、反対派が圧勝した。

更に市長選挙が行われ、反対派が推す対馬島司の北原雅長が金井を圧倒的多数で破り、初代市長となった。市長、議長、議会が水道反対派で押さえられ、今後の水道事業の先行きは難しくなった。

しかし同年の市議会で、北原市長は水道工事継続の議案を上程した。議会は大紛糾の末可決した。今中止すれば既に支出した金額が無駄になる等の理由で、反対派も賛成せざるを得なかったのである。

六、上水道の完成

明治二四年（一八九一）三月、上水道工事は起案から五年目に完成した。近代的水道としては横浜、函館に次ぐ、全国三番目であったが、水道専用ダムの水道としては、日本初であった。



(1) 完成した水源池
貯水池と濾過池

(2) 完成した水源池
堤防と配水池

水道完成後も、反対派市民の反応は冷やかであったが、水道の利便性や水道防火栓の威力などがわかるにつれ、受け入れられていった。

本河内水道完成から三年後、長崎は水飢饉に襲われ、水道はついに断水までに追い込まれた。

第二代市長横山寅一郎は、明治三二年（一九五七）三年計画で工事費一四二万円の新水源池建設案を市議会に上程したところ、満場一致で可決され、市民も大多数が賛成した。

本河内水道が完成してから、僅か八年での市民の意識変化には、驚くべきものがある。近代都市には上水道が不可欠という認識が、広く理解されたからであろう。

明治三六年（一九〇三）に本河内低部水源池が、翌三七年に西山水源池が新たに通水を開始した。

(1)(2)は長崎歴史文化博物館収蔵

参考文献

『長崎市水道百年史』長崎市水道局一九九二年

第三回長崎学公開講座 第二部発表要旨

フィッセル本に見る川原慶賀筆『人の一生図』

原田　博二

一、『人の一生図』とは

川原慶賀が人の誕生から死去までを二三図に描いたもので、現在、『人の一生図』としてライデン国立民族学博物館のフィッセル・コレクション（フィッセル本）やシーボルト・コレクション（シーボルト本）にそれぞれ収められている。

フィッセルは、オランダ商館員で、シーボルトより三年早い文政三年（一八二〇）に来日しているので、フィッセル本は、シーボルト本より早く制作されたものと考えられる。

フィッセル本は、現在、1帯祝・産湯図が欠けているが、もとはあったことが確かめられる。

また現在、慶賀の印（朱印）が認められるのは、このフィッセル本だけである。

ところでフィッセル本の14病臥図と16湯灌図と

では息子夫婦の年格好が違うこと、16湯灌図では早桶（写1）であるが、20葬列図（1）では座棺（写2）であること、さらには23墓参図に喪主である老母がいないことなど前後が関連しないものも含まれているので、この『人の一生図』は、誕生から死去までを一貫して描いたものではないことが指摘される。このことはシーボルト本も同様である。

写1　早桶「湯灌図」部分
（フィッセル本）

写2　座棺「葬列図」(1) 部分
（シーボルト本）

二、『人の一生図』の主人公は誰か

『人の一生図』に描かれている主人公は、2宮参図（1）と3宮参図（2）の赤子（男の子）、4袴着図の男の子、5元服図と6出会図の若者、12婚礼図の花婿と、前半は息子が主人公である。

しかし13歳祝図と14病臥図の老人、15死去図と16湯灌図の死人は、父親であろうか？それとも息子であろうか、以上の図を見てもわからない。

さらには19送火図には水桶を持つ老人と裃を着けた男性が描かれているので、この老人は誰なのか？一体誰が亡くなったのかと改めて考えさせられる。

写3「墓普請図」部分
（フィッセル本）

しかし18墓普請図に寺院の境内で墓地のそれも新規に墓地を普請する様子（写3）が描かれている。

これはシーボルト本も同様で、寺の後山に新たな墓地を普請する様子が描かれている。

それではこの墓は、誰の墓であろうか？仮に息子の墓とすると、父親の墓はないことになるので、この墓は、父親の墓ということになる。

ということは後半の主人公は父親、13歳祝図から主人公が息子から父親に替わるのである。

三、この親子は、何者か

この親子は、2宮参図（1）、3宮参図（2）、4袴着図、5元服図、6出会図、7仲人図、さらには14病臥図までは、裕福な普通の町人である。

しかし8結納図あたりから上流階級の身分となり、はては22葬儀図の位牌の「大居士」、シーボルト本には「萬壽院殿延長生徳大居士」（写4）とある。

江戸時代、院殿大居士は、一万石以上の格式、長崎では長崎奉行にだけに許された法名で、たとえ長崎町人のトップ町年寄といえども院殿居士であった。

写4　位牌「葬儀図」部分
（シーボルト本）

であるから院殿大居士などあり得ないのであるが、このようなことが描かれているのはどうしてであろうか？

このことについて同様のことがシーボルト本にも描かれている（写5）。すなわち「淫好助兵衛賢張　行年一百九十戌卒」、「粋酒玄吐行年」であるが、こんな法名があるわけない。

写5　墓碑「墓参図」部分
（シーボルト本）

このことについて慶賀がフィッセルやシーボルトが漢字を読めないことを幸いに悪戯をしたというのが大方の見解である。

しかし筆者は「淫好助兵衛」とか「粋酒玄吐」さらには「行年百九十」と書いた絵師は、その意味がわからないで書いたのではないかと考えていて、本レポート一三号にも、日本人ではない絵師の存在に言及した。

この「萬壽院殿延長生徳大居士」についても、当時の日本人であれば、院殿大居士がどういうものか当然わかっているはずであるので、これも日本人以外の絵師によって意味もわからず書き写されたものと考えている。

四、結語

以上のようにこの『人の一生図』は、後半、主人公が息子から父親に替わることなどから人の誕生から死去までを一貫して描いたものではなく、描かれたものを主題毎にまとめたものということが確認された。

さらには慶賀ひとりの制作ではなく、工房での分業、それも日本人ではない画家、筆者は、以前、オランダに慶賀作品の工房があったのではないかと発表したことがあるが（『長崎新聞』平成一九年三月四日版）、彼ら画家たちも含めた分業と考えている。